

転生者達のダンジョン 遊戯

手湖

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Fateのキャラに憑依した転生者達がダンまちの世界でなんかするお話です。

目次

状況説明的ななにか	1
刀狂いの農民	5
神会〈デナトウス〉	10
城壁の上で	16
泰山	21
旅	26

状況説明的ななにか

そこは、ダンジョンの中層。2人の冒険者がいた。

広い通路の正面にヘルハウンドが2匹、ミノタウロスが3匹。距離はおよそ5メートル。冒険者の片割れ、和装の男が、剣を持ち1歩で距離を詰める。

ただ、首を斬る。何の抵抗もないように、一撃で首は斬り飛ばされた。5回、剣は振られ戦闘は終了した。

落ちた魔石を袋に入れ、一息つく。

「今日は、こんなものでいいか」

「あれー、もう帰っちゃうんですか?」

片割れのもう1人がそう声をかける。こちらも和装の女だ。

「ああ、この体にも大分慣れた。これ以上は必要ないだろう。沖田は、まだやるのか」
「そうですねー。沖田さんも動きの確認は十分ですかねー。まだまだ、斬りたい欲求もあります。今日はやめておきましょうか」

「それでは、帰るか」

目的を終え、軽い足取りでダンジョンの上層へ向かう2人。道中、出会うモンスターを斬り飛ばしながら進んでいる。

「いやー、この世界に転生したときはどうなるものかと思いましたが、なんとかかなりそうですね。『転生特典としてFateの英霊の姿と能力やるから好きに生きてくれ』って言われてダンまちの世界に送られて。よくわからないうちに、気づいたらステッノ・ファミリアに所属していて。同じ境遇の転生者がいっぱい居たのには驚かされましたけどねー。

ところで、今さらですけど渡辺さんもFateのキャラなんですよね。あんまり見覚えありませんけど」

「ああ、渡辺綱。FGOに出てきたセイバーだ。FGOをかなり進めていないと知らないか。まあ、Fateに出てくる英霊は多いし全て把握するのは難しいだろう。アルトリアみたいに別の側面をもつ英霊も多かったからな」

「ああー、アルトリアの増殖はすごかったですね。かくいう沖田さんもアルトリア顔ではありますし。ただ、このアルトリア顔、この世界だと姉妹かなんかだと思われるんですよねー。前、セイバーさんやヒロインXさんと街を歩いていたときなんか、注目度がすごかったですし。」

「アルトリア顔が3人か。それは、すごそうだな」

「ええ、まあステンノ・ファミリアの知名度もだいぶ上がってきましたし、間違えられることはあんまり無いんですけどね。その知名度も、変人集団とかあんまり良いものではないかもしれませんが」

「仕方がないだろう。転生特典の影響もあつてステイタスの更新ができないのだから。まあ、そのことを誤魔化すために、表向きの理由として、神の恩恵に頼らずヒューマンとしての限界に挑戦するなど主張しているのだから。ステイタスの更新もせずダンジョンに潜り続けるなんて、傍から見たら狂人だろう。それが、1つのファミリア規模でいるんだ」

「そう言われると、なんだか私たちがやばい集団みたいですねー。」

「実際、その通りだろう。ファミリアの方針は『平穩に2度目の人生を楽しむ』だから、そうそうトラブルが起きることはそうそうないだろうが」

「あー、話は変わりますが、原作つてどうするんでしょうかね。基本介入はしない方向なんでしょうね？ 確か」

「ああ、下手に介入すると何が起こるかわからなくなるからな。ちょうど今は、主人公のベル・クラネルがヘステイア・ファミリアに入った頃か。まあ、何かあったとしても、幹部の人たちがなんとかしてくれるだろう」

「それもそうですね。教授さんも裏で何かしているみたいですし、なんとかかなりそうですねー。それじゃあ、私たちは好きにこの世界を楽しみましょうか。しばらくは、ダンジョンに潜ってお金を貯めて。渡辺さんもそれでいいですか？」

「そうだな。まあ、しばらくはそれでいくか」

「それじゃあ、早く魔石とかを換金しにいきましょう。今日は、かなり倒したのでそれなりのお金になるはずですよ」

そして2人は、ダンジョンの出口へと足を早めた。

刀狂いの農民

日が傾き、街は黄昏に染まっている。ダンジョン帰ってきた冒険者が、仕事を終えた労働者達が酒盛りをしようとして道を行き交い賑やかになっていく。

ここ、迷宮都市オラリオの北西に位置するステンノ・ファミリアのホームでも、夕食をとろうと人が集まっていた。

ホームの中。庭に面した窓のそばに、団員の一人である転生者の渡辺綱がたたずみ外を眺めていた。

「渡辺さん。そろそろ、夕食の時間です。みんな食堂に集まり始めてますよー。そんなところで何してるんですか？」

廊下の向こうから沖田が近づいていく。渡辺と同じように窓の外を見ると、庭で1人の男が長い刀で素振りをしていた。

「アサシンさんですか。あいかわらず刀を振り続けてるんですね」

「ああ、朝から一日中ああしているらしい」

「あれで、本当に強くなれるんですかねー？」

「転生者の強さは元となった英霊の逸話などに依存している。新撰組として斬り合い

をしていた沖田総司や鬼を相手に戦っていた渡辺綱ならば、ダンジョンでモンスターを斬り殺していればそれなりに体が馴染んでくる。しかし、Fateの世界における佐々木小次郎は山の中で一人刀を振るい続け、燕返しを習得したといわれているからな。だから、燕返しを習得するまではああやっているつもりらしい」

「いやー、先の長そうな話ですね。もしかしたら、一生かかるんじゃないですか?」

「それが、そうでもないらしい。ステキノと技術班の話だと既に宝具レベルの再現に届きかけているらしい。そう時間はかからないかもしれないぞ」

「それは、なんともすごい話ですね。」

つて、それより早くいかなないと夕飯が無くなっちゃいますよ。アサシンさんにも声をかけて早く行かないと」

そうして2人は、庭にいるアサシンにも声を掛けながら食堂に向かっていった。

次の日の朝早く、渡辺が庭に出ると佐々木小次郎が昨日と同じように刀を振るっていた。

「相変わらずだなアサシン。視界に入るといつも刀を振るっているな」

「ああ、渡辺殿か。いや、私には刀を振るうことしかできなくてな。しかし、昨夜月明

かりの下刀を振っていたらようやく燕返しが完成してな。興奮を抑えきれず一晩中刀を振るってしまった」

「……もう、燕返しが使えるようになったのか？早すぎないか、それは」

「この世界に来てからひたすら刀を振るい続けたからであろう。それしかしてこなかったからなあ。」

私も、そろそろダンジョンに潜ろうかと考えている。その時は、先達として世話になるぞ、渡辺殿」

「ああ、そのときはよろしく頼む」

2人が話していると、近づいてくる者がいた。

「2人ともここに居たんですね。アサシンさん、ドクターたちが呼んでましたよ。何か話があるらしくて」

「ふむ、もう気づかれたか。いや、伝言感謝する。すぐに、行くでしょう」

そう言って、佐々木小次郎はその場を後にした。

「渡辺さん、渡部さん。アサシンさんに何かあったんですか？いつもと雰囲気の違いが違いますか？」

「ああ、ついに燕返しが完成したらしくてな。話もそのことに関してだろう」

「えっ、もうできたんですか。その話をした昨日の今日でって、早すぎないですかね」

「まあ、アサシンほど宝具の再現を目指していたやつはいないからな」

「うーん。私はいまだに使える気配すらないんですけどねー。もつと、ロールプレイを意識したほうがいいんですかね？」

「個人差もあるだろうし、ほどほどでいいのではないか。今でも十分な強さは持っているしな」

「それもそうですね。それじゃあ、今日もダンジョン攻略に励みましょうか。モンスターを斬るのは楽しいですし、強くもなれるから一石二鳥ですね」

「ああ、そうだな。今日も行くとするか」

ステンノ・ファミアでは役割ごとにおおまかなグループに分けられている。中でもダンジョンに潜る者達は戦闘班と呼ばれている。戦闘班の団員はソロまたはグループでダンジョンに潜っている。転生者達は癖の強い者が多く、集団行動に向いていない。そのため、ソロで潜る者が多い。ただし、ダヴィンチを初めとした技術班により作成された、この世界においてはチートといえるアイテムの数々により不便を感じている者はいない。英霊の能力は千差万別であり、自分の能力を活かすことを転生者達は楽しんでいる。

しかし、そんな転生者達でも、ダンジョンには数日おきに潜っている。1度ダンジヨ

ンに入った後は、数日間を休息や装備の点検に当てる。そのため、連日のようにダンジョンに向かう渡辺と沖田の2人は転生者達の中でも戦闘好きの変人としてひとくくりにされていた。

そんな2人は、今日もダンジョンに潜ろうとしている。結局のところ、戦闘狂という点では似たもの同士な2人であった。

神会へデナトウスへ

迷宮都市オラリオ、その中央にそびえ立つ摩天楼『バベル』。

その30階にある大広間において神会が開かれようとしていた。大広間の真ん中には、50人は座れそうなほどの大きな円卓が置かれている。

ロキ、ヘファイストス、ガネーシャを初めとして、Lv. 2以上の冒険者―すなわち上級冒険者を保有する実力を認められたファミリアが集っている。3ヶ月周期で行われる神会〈デナトウス〉で、彼らは情報共有及び命名式を行っている。

「俺がガネーシャだ！　そして俺が今回の司会進行を行う！」

「いえーい。」

「うわー、ガネーシャか。暑苦しくなりそうだな」

「よし！　まずは、情報公開からだ！　俺から都市の近況の報告を始めさせてもらおう！」

暑苦しい言動のガネーシャだが、司会進行役としての役割はしっかりと果たし、会議はサクサクと進んでいく。

「さて、他に何か報告することはないか！　些細なことでもなんでもいいぞ！」

「あー、1ついいか？ ステンノ・ファミリアのことについてなんだが」

ある神の発した言葉に場がざわつく。

「ステンノ・ファミリアってあの変人集団か」

「あそこって、ステイタス更新しないんだったつかけか」

「俺、あそこの団員勧誘しよとしたんだが全く相手にされなかった」

「ああ、強くなりそうな奴もいるしもつたいないよな」

「なんか、同じような顔の子が何人かいて思わず二度見したことがあるぞ」

「かわいい子も多いしな」

ステンノ・ファミリアを知る神達によつて、話が広がっていく。収集がつかなくなる前にガネーシャが一声かけ、発言した神に続きを促す。

「よーし、一回静かにしよう！まずは、彼の話からだ！」

「いや、俺のファミリアの子の話なんだがな。最近、中層でステンノ・ファミリアの団員を見かけるようになったみたいなんだが」

彼の言葉に、他の神達は疑わしい表情を浮かべる。

「ステンノ・ファミリアにLv. 2以上の冒険者ついていたっけ？」

「いや、いないはずだぞ」

「というか、ステイタス更新自体してないって公言してるしな」

「じゃあ、デマか」

「まさか、神の恩恵でずるしてるとかじゃないよな」

ここで一人の女神、ロキが手を挙げた。

「あー、ウチからもちよつとええか。ウチんとこの子からも似たような報告があつてな。なんでも、遠征中に下層で遭遇したつちゆうんや。確か、セイバーとか名乗つとるやつとかヘラクレレスとかいうでつかいやつ、5人で潜つとたんやと。一応話した限りだとおかしな様子は無かつたみたいやで。」

それで、問題なんがそのヘラクレレスつちゆうやつが半裸やつたんやけどステイタスがむきだしやつたんや。んで、神聖文字を読める奴が見たところ初期ステータスのまま。それが本当なら、神の恩恵もろくに受けずに上級冒険者並みに強くなつたゆうことか？明らかに異常やろ。1度、ステンノの奴を呼び出したほうが良いんとちゃうか」

ガネーシヤは少し考えひとまずの結論をだした。

「よし、ひとまずはステンノに話を聞いて、恩恵を使ってズルをしてないか確かめる。もし、使っていないかつたら問題は無い！それで良いか！」

その場では、特に反対意見もせず、会議は続いていった。というより、情報交換会の後にある命名式に意識がいつて早く終わらせろと思う神が多かつたのもあるのだろう。この場で真偽を確かめられないことに時間をかけても仕方がないと思つたのかもしれない

ない。

その後は、特に大きな話題もなく命名式に移っていき、この日の神会へ「デナトウス」は終了した。

場所は変わって、ステンノ・ファミリアのホーム。その中の1室で、ステンノ・ファミリアの幹部が集まりこれからのことを相談していた。

1人は、団長でもあるロマーニ・アーキマン。人の姿のためか、ソロモンとしての能力はなく完全にただの人である。前世の知識を活かしながら医療の分野で転生者達の支援をしており、気づけば団長の地位を押しつけられていた。

二人目は、新宿のアーチャーの姿をしている。某教授の頭脳を活かし、ファミリアの管理や他勢力との交渉を担当している。

そして、最後の1人は、アルトリア顔第一号のセイバーである。ダンジョン攻略の第一線としてグループでダンジョンに潜っている。

彼らの話す内容は、主に転生者達のやらかしと原作への介入をどうするかである。

「僕が団長になってから、もう結構な時間がたったなあ。ひとまず、ファミリアとしての体裁は整ってきたから、しばらくは落ち着けるかな？」

「ふむ、ドクター。現実逃避はするべきじゃないと思うがね。今のオラリオの現状を見た限りだと、原作が開始されるのはもうすぐだ。それに、戦闘班が下層でロキ・ファミリアと出会ったという話もある」

「そんなに、深刻な問題なのですか？ 私がダンジョンで出会ったロキ・ファミリアとも特にトラブルはありませんでしたし、原作には積極的に介入しないという方針でしたでしょう？」

「あー、それなんだがね。そろそろ、私たちの異常な強さが目立ってきてしまったんだ。実際、女神ステンノの恩恵を利用してはいる訳ではないから、誤魔化すことは可能なんだけどね」

教授は、怪しい笑みを浮かべながらそう言う。実際、教授なら口先で丸め込んで不正はいっさいしていないということにしてしまうだろう。神を相手に嘘は通じないが、嘘を言わなければ良いだけの話なのだから。多少、怪しまれても証拠は無い。

ドクターは胃をおさえながら言う。

「君たちも、ほどほどにしてくれよ。団長の座を押しつけられてから、ファミリアとしての責任の所在が、僕に降りかかってくるんだ。これから先のことを考えただけで、何か

あつたらと、胃が痛くなつてくるよ」

「ええ、もちろんです。今までも、大きな騒ぎも起こしてこなかったんです。これから、大丈夫ですよ。きつと」

「うーん、微妙に不安もあるけど、心配し続けても仕方がないか。原作が始まるまでは、特に何もないだろうし、普段通りの生活を楽しもうか」

そうして、幹部3人でのこれから先の方針に関する会議は終わった。

ステンノ・ファミアが存在することで原作からどのような変化が起こってしまうのか。この時点でわかっている者はいなかった。

城壁の上で

煌々と月が天頂で輝いている。迷宮都市外周の城壁の上。オラリオ全体を見回すことができるこの場所で一人物思いにふけっている。

中央にそびえる『バベル』。時代を感じさせる西洋風の町並み。こうして眺めていると、自分が異世界に居るといふ実感が強まってくる。

なぜ、自分は転生したのか。なぜ、この世界に転生したのか。なぜ、この姿で転生したのか。

渡辺綱。日本の英霊。平安時代に生きた武士。源頼光の配下として、坂田金時らとともに鬼や魔性のあるものを相手に戦っていた。茨木童子の腕を切り落としたという逸話もあり鬼殺しとして名を馳せた。

本来、ただの一般人だった自分なんかが真似できるような人ではないだろう。転生特典としてこの姿になって、初めに思ったことだった。

この世界に転生して、およそ半年が過ぎた。同じ境遇の仲間も大勢いて、不安も小さかった。しかし、こうして街並みを眺めていると、自分という存在の希薄さを感じてし

まう。前の世界の自分とは、似ても似つかない姿。言ってしまったえば、創作物の中の世界に、創作物のキャラクターの姿をして立っているという不安定さ。それを強く感じてしまふ。

やはり、夜の街並みを見ようと、こんな場所まで来るべきではなかったか。どうにも、情緒が落ち着かない。

昼は仲間とともにダンジョンへ行き、夜はホームで休息をとる。ただ、これを繰り返すだけの毎日。この半年間は本当に、楽しい日々だった。

だからこそ、不安を感じてしまふ。これから先の日々に対して。

英霊は、それ自身が完成した人間だ。いや、完成しているからこそ英霊になり、その状態で座に登録されているのか。今までは、英霊としての能力に徐々に慣れていくことで強くなっていくように感じていた。正確には、本来の強さに近づいていったといふべきなのだろう。

今、その強さの上限に近づいてきている。英霊本来の強さに到達したとき、その先に進むことができるのか。自分にはわからない。

それでも進むしかないか。ダンジョンに潜り限界を超えて偉業を成し遂げる。この世界の冒険者は皆やっていることだ。自分もそうやっていくしかないだろう。

「おーい、渡辺さん。こんなところで何やってるんですか？」

これからの自分のあり方、ひとまず自分なりの結論を出したところで、突然声をかけられた。

下を見ると、沖田が城壁のうえに上がってきている。やけに、体がふらついているなと思ったがよく見ると顔が赤い。そして、手には酒瓶を持っている。ああ、これは完全に酔っているな。

「危ないぞ。酒を飲みながら、こんなところまで上がってきたら」

「だーいじょうぶですよー。これくらいじゃ、酔ったうちにも入りませんって」

完全に酔っ払いの言動だ。

「それよりもー。渡辺さん、やけに思い詰めたような顔して外に出て行くのが見えただ、ついてきたんですよー。でも、見た感じ、もう大丈夫そうですねー」

「ああ、これから先のことについて考えこんでしまっただ。自分なりの答えはでたからもう大丈夫だ」

「そーですかー。いやー、渡辺さんって何考えているかわからないところがありますからちよつと心配になつちやつたんですよねー。渡辺さんは繊細そうな見た目してますし。沖田さんなんかは、モンスター斬りまくるのが楽しくて、毎日不安を感じるようなこともないんですけどね」

そう言う沖田は、酔いがまわっているのか左右に揺れており、かなり危なっかしい。「感情表現がどうにも苦手だな。渡辺綱というキャラとは関係なく前世からそうだった。まあ、ダンジョンに潜る毎日は楽しんでる。それに関しては、保証しよう」

「それは良かったです。正直、毎日ダンジョンに誘うのはやりすぎかと思ひ始めまして」

「今さらだろう。というかもう半年ほど経つぞ」

「いやー、お恥ずかしいことに、転生したことでテンションが上がってしまったていて、ようやく最近落ち着いてきたんですよ」

「そうなのか」

「はい。」

ところで、渡辺さんも飲みますか？

沖田が酒瓶を差し出してきたが中は空だ。いや、どれだけ酔っているんだ？

「あー、疑問だったんだが、なぜそんなに酒を飲んでいるんだ？ 普段あまり飲まないだろ

う」

「景気付けですよ。てつきり、もっと重い話になるんじゃないかと思ったりして、追いかけるのにためらっちゃいましたね。お酒を飲んだら、いつものテンションで突撃できるんじゃないかと。」

ただ、ちよつと飲み過ぎたみたいで。体が動かないんでホームまで持つて帰つてくれませんか」

「おまえをか？」

「はい、ちよつと今動こうとしたら、落ちちやいそうでした」

「しかたないか。次、酒飲むときは少しおさえてくれよ」

「はい」

沖田を抱えあげてホームへと足を向ける。

これから先、どうなるかはわからない。それでも、せつかくの2度目の人生だ。楽しんでいこう。そう改めて決意した。

泰山

ステンノ・ファミリアにより経営されている飲食店がある。その店は、ファミリアの運営資金のためというよりは、ある転生者の趣味のために開かれた。

メインストリートに面した一角にあおの店はある。店名は『泰山』。F a t e s t a y n i g h t において言峰綺礼がよく通っていた冬木市にある中華料理店『紅洲宴歳館・泰山』にあやかって付けられた名前だ。そのため、メニューは「麻婆豆腐」や「炒飯」を初めとした中華料理で占められている。

時刻は夕方。大通りに面していることもあってか店内はなかなか賑わっている。店内では、店員が注文を聞き給仕を行っている。しかし、彼らの多くはステンノ・ファミリアに所属しているわけではない。ファミリア所属の団員は2人。厨房で大量の料理を作っているタママモキヤットの転生者、店員兼用心棒として紛れ込んでいるクーフリーンの転生者の2人である。この2人は、ファミリア幹部の教授により店の経営を任ざれていた。

「おーい、店員さん、麻婆豆腐2つ」

「いやー、珍しい料理が多いって聞いていたが結構いけるな」

「ああ、ステンノ・ファミリアの巢窟だなんて噂もあつたが、そんな雰囲気もないな」
「どうせ、ガセだろ」

「でも、実際、団員はよく見かけるらしいぞ、セイバーとかいう奴とか」

「そいつ、料理店ならどこにでも出没するんじゃないか」

「あれ、そうだったっけか」

客達は、談笑しながらオラリオでも珍しい料理に舌鼓を打っている。辛口の料理が多く、酒類も提供しているこの店は冒険者達に気に入られているようだ。

夜も更け、大通りの商店も店じまいを始めた頃『泰山』でも、その日の営業を終え片付けに入っていた。既に、店員の大半は帰り店にいるのは転生者の2人だけだ。

「お疲れ様にやー。今日もがつり稼げたことだし、明日に向けしっかり休むにやよー」
「ああ、お疲れさん。急に教授の奴が飲食店を経営するとか言い出したときは何を言ってるんだと思つたが。これなら、なんとかかなりそうだな」

「そうだにやー、転生者だからファミリア内で閉じこもるのではなく、他者とのつながりも作っていきたくて言つてたしにやー。幹部の人は大変にやねー」

「んー、あいつのことだから、裏で何かたくらんでんじゃないかと思つたんだがな。杞憂だったか？」

「いくら、怪しくつても同じ仲間をそんな風に言うもんじゃないや。きつと、大丈夫にや。多分」

「いや、そこは、言い切つてやれよ」

『泰山』ができた経緯を振り返りつつ、教授が何か企んでいるのではないかと思う2人。今のところ、不利益もないしあの人も仲間を傷つけるようなことはしないだろうと、ひとまずは納得することにした。

「店のメニューもこんなもんで良さそうだな。中華料理が受けるかわからなかったが、客の反応はいいようだぜ」

「そうにやー。本当は原作に出てきた激辛麻婆豆腐もメニューに加えたかったんだけどにやー」

「それは本当にやめろ！継続戦闘系のスキルがあるはずの俺でも3日寝込んだんだぞ。あんなもん出したら客が寄りつかなくなるどころか死人がでるぞ」

「あれはすまなかつたにやー。でもF a t eファンとして抑えられなかったんだにやー」

『泰山』経営準備にあたりさまざまなメニューを試していたタマモキヤット。試作品にはあの激辛麻婆豆腐も含まれており、それを試食したクーフリーンにはトラウマになっている。ちなみに、試食会はファミリアで行われていたため、その被害は大きなも

のとなった。結局、Fateの熱烈なファンだった転生者たちの後押しもあったが、被害を重く見たドクターと教授により激辛麻婆豆腐は絶対に人にふるまってはならないと封印された。

「あんなのはもう勘弁してほしいぜ」

「でもにゃー、何かしらインパクトのあるものが店にあった方が良いと思ったんだがにゃー。その店の特色みたいなにゃー」

「いや、インパクトのあるっておまえがそうじゃねーか。獣耳、獣の手、獣の足の料理人なんてそうそういないぞ。語尾がにゃーにゃー言ってるのはどうかと思うが」

「キヤットも好きでにゃーにゃー言ってるわけじゃないにゃ。本来の語尾がワンはきつすぎるにゃ。でも英霊に少しでも近づかないと本領発揮できないから、仕方なくにゃーにゃー言ってるにゃ。ニャー語尾だったら、タマモキヤットは猫要素が名前にあるからか、ぎりぎりセーフみたいだにゃ」

「ワンもにゃーもきつきにあんま差はないと思うがな。まあ、要は、にゃーにゃー言うのも英霊の力を出すためってか」

クーフリーンは癖の強い英霊に憑依してしまった転生者に同情した。

しかし、彼もまた忘れていた。自分の憑依先のクーフリーンは幸運Eであり、Fateでは不運の代名詞であったことに。これから先に待ち受ける苦難に彼はまだ気づい

ていない。

旅

僕は今、馬車に乗っている。6人がどうにか乗れる程度の小さな馬車に。整備された街道の上をガタゴトと音をたてながら進んでいく。

前世で主な移動手段だった車に比べると、揺れが大きく乗り心地は正直良くない。それでも、歩いて移動するよりはよっぽど早い。

迷宮都市オラリオ。この世界、「ダンまち」において中心となった場所。そこへ、僕は向かっている。

半年前、この世界に転生してから、僕は旅にでた。世界を回る旅だ。大陸の最西端にあるこの都市を出て、ひたすら東を目指し歩いた。ただ、この世界のことを知るために、この世界が現実であると理解する。ただ、それだけのために。

砦に囲まれた城塞都市、華やかな街並みときらびやかな城が建つ都市、多くの都市を巡った。陽気で荒々しいドワーフの人達に会った。他種族との接触を嫌う誇り高いエルフに会った。高い戦闘技術を持ち闘争を望むアマゾネス達に会った。彼らは、前世で

言う人間——この世界ではヒューマンと呼ばれる——ではない。前世では、お伽噺に空想上の種族として存在していた。そんな彼らと交流し、彼らは作り物ではない、この世界に存在しているということを実感した。見る物全てが珍しく、何にでも驚きを示した僕を、彼らは変な人だと思っていたかもしれない。

そうして、旅に出て3ヶ月。東の果て、極東にまでたどり着いた。極東。昔の日本のような雰囲気をもちながらも、やはり日本ではなかった。この世界に、かつての故郷はもうない。極東を見たことで、ようやくそのことを理解できた。

さて、どうしよう。極東まで行き、この世界がかつての世界と違うことを理解した僕が持ったのは、これからどうすればいいだろうかという疑問だった。もう、オラリオまで帰ろうか。少しの間考え、出てきた結論はそれだった。

オラリオには僕と同じ境遇の仲間がいる。転生して1週間。自分達が転生したことを理解し、ファミリアとしての形が整った時間だ。それから、それぞれが思い思いに、やりたいことを見つけていった。僕は、そんな中で自分のやりたいことを見つけられな

かった。僕は彼らのように英霊ではない。彼らのように、何かしらの特別な才能があるわけではない。

そのことで、彼らに責められたり、貶められたりすることはなかったけれど。なんだか、そこに居づらくなって、旅に出ることを決めた。この世界を旅し、この世界を知ること、僕が自分の存在を肯定できるようになるかもしれない。そう思つて。僕が旅にすることを伝えたのは、ドクターと教授の2人だった。突然、この世界に混乱する僕たちを、フアミリアという形でまとめあげた2人。彼らに、自分探しの旅に出ると告げた。彼らは、心配しながらも幾ばくかの路銀とともに送り出してくれた。いつでも、帰つてこい。仲間はこちらに居るからと言つて。

自分探しの旅に出ると言つた手前。とくに何かを見つけられたと言えない状況で帰るのは、少しばかりためらわれた。それでも、これから他に行く場所も特にはない。帰ろう。そう思つて、オラリオに向かつて帰り始めた。途中、立ち寄つた街で、オラリオ行きの馬車を見つけそれに乗りながら、向かつている。

馬車の中には、僕の他に、2人の親子もいた。小さな女の子とその母親だろうか。2人は、

怪物祭を見るために、オラリオまで行くらしい。

怪物祭その名称を聞き、原作のことを思い出した。確か、1巻で怪物祭の場面があったはずだ。もう原作は始まっているのだろうか。僕が、旅に出る前、ファミリアのルールの1つとして積極的に原作に介入しないというのがあったはずだ。今もそのルールが変わっていないとすれば、ステンノ・ファミリアはそれほど目立たずにひっそりと活動しているのだろうか。そう思ったが、転生したことではつちやけ、無茶をしようとしていた仲間のことも思い出し、それは無理だろうなどと自分の考えを否定した。まあ、教授やドクターもいることだし、まずい事態にはなっていないだろう。そう自分に言い聞かせながらも、一抹の不安は拭いきれなかった。

オラリオにいる仲間達のことや原作のことについて思いを馳せている内に、馬車での旅はあっという間に終わってしまった。歩いて、極東までときよりも圧倒的に早く着いた。

オラリオに着いて、さっそくファミリアのホームへと向かった。時刻は昼間。みんなこの時間帯は何をしているのだろうか。ひよっとするとダンジョンなどに行っていて、ホームにはあまりいないかもしれない。そう考えながら進み、ホームの前にたどり着いた。

半年前より、若干豪華になつてゐるような。久しぶりに見るホームに、そんなことを思いながら入つていけない。入つてすぐの広間には誰もいない。確か、右奥に医務室があつたはずだ。そこに、ドクターがいるだろうか。彼はそこで、怪我人がでも大丈夫なように、常に居るようになつていたはずだ。

医務室の前まで来た。1度息を吸い、扉を開く。

中には、旅に出る前と変わらず、ドクターが椅子に座つていた。こちらを見て、驚いたように目を見開いている。それでも、僕が帰つてきたことを理解し始めると、その表情はだんだんと喜びの感情に變つていく。

ひとまず、帰つてきた挨拶から始めようか。僕は忘れられておらず、帰つてきたことを歓迎してくれる人がいることに安心しながら、口を開いた。

「ただいま、ドクター」

ドクターもうれしそうに答える。

「ああ、おかえり、藤丸君」